

陽明学関係書 紹介と短評

○岡田武彦著 『王陽明大伝一 生涯と思想』

（『岡田武彦全集』1）

平成十四年十二月、明德出版社刊。A5版、318頁。

開巻冒頭に王陽明の肖像画（現代の画家による）、ウラは瑞雲楼遺址の写真。まえがき、王陽明関連地図。その後本文。目次を掲げると次の通りである。

序章 文武両全の大哲人。 第四章 五溺の時代。

第一章 大哲人の生誕。 第五章 聖学への道。

第二章 祖先の令徳。 第六章 聖学の唱道。

第三章 豪放不羈の少年。 の6章より成る。

この大伝は、全三〇章を予定しており、その後、終章として「陽明の臨終」、付録として「陽明の子孫」となる予定である。

先生には既に『王陽明小伝』（B6版、267頁）が平成七年に、本書と同じ明德出版社から刊行されているが、卒（卒）寿を越えられている先生が、畢生の作として、世に問われたもので、その第1冊目である。

「まえがき」の中で、先生八十三歳の時、第4回目の王陽明遺跡の調査旅行をされ、其の際、王陽明が舟中で逝去した青竜鋪の章水の河岸に立たれたとき、「私は当時の陽明の心中を偲び、思わず嗚咽を禁じ得なかったが、そのときの感動は生涯忘れること

ができない」と述べておられ、この中国旅行より帰国後、少しづつ書かれたのが本書である。

先生は、本書を書くに当たって、『王文成公全書』を基本資料とし、写本で伝わる東正堂の『陽明先生全書論考』などの関連図書を参考にされたが、必要に応じてフイクションと思われる箇所のある『王陽明出身靖乱録』などを引用されているのは、王陽明の哲学思想の精神の真髓を表すには、このような小説が、直接読者に感得されやすいと考えられたからである。従って、本書の中は、一般の読者の心に染み込んでくるような表現がなされているのを、次の文から味わっていただきたい。

英明豪邁、まことに文武の全才を備え、左手には書を持して学を講じ、右手には剣を撫して三軍を叱咤した、大哲人にしてしかも豪傑という世にも類稀で偉大な儒者、王陽明も病には勝てず、命旦夕に迫り、波乱万丈の生涯に永い別れを告げなければならぬ日を訪れた。（中略）その労苦のために持病の労咳が再発し、翌、嘉靖七年十一月、使命を果たして帰途についたころは病も重くなり、下痢さえ伴うようになった。そして南安に辿り着いて舟に乗った時には、もはや立ち上がることができないほどの重症となった。南安の役人の中に陽明の門人、周積がいた。周積は陽明が南安に到着したので、さっそく見舞いに出かけた。彼を訪れると、陽明は寢床に臥して劇しく咳きこんでいたが、やおら起坐して彼にいった。「この頃、学問はどうか。少しは進歩があったか」「はい、それに政治も先ず順調です。お身体の具合は如何ですか」「もう駄目だ。ただ気力だけ

でやっと今日まで生き永らえてこられたのだ」それから二、三日経って生命の灯が消え去らんとするのを感じた陽明は、使者を出して周積を舟中に招き寄せた。彼は悲愴な気持ちで駆けつけて陽明の枕辺に立ち、頬がげっそりとそげ落ちた師の顔をじっと見つめた。その気配で陽明は静かに眼を開き、頭を周積の方に向けた。「さらばじゃ」(P15—16)

○銭明主編『陽明学新探』

二〇〇二年四月、中国美術学院出版社刊。B6版、332頁。

浙江省社会科学院国際陽明学研究センターの編集(主編者は銭明)王陽明逝世四七〇周年紀念国際陽明学研討会の論文集。

浙江省社会科学院国際陽明学研究センター、紹興市社会科学院等の主催による国際学会。一九九九年三月二九日—四月三日、挙行。

- (1)王陽明の墓祭。(2)陽明洞天の奠基儀式。(3)学術研究発表。(4)陽明関係の遺跡参観。

本書は、会議において発表された論文、また会議の記念に寄せられた論文や賀詞等四十篇を収めたものである。

内容は、陽明学の歴史的意義から現代的価値にいたるもの。王陽明思想の特質。陽明学の淵源・形成・発展等。陽明学と道教・仏教の関係。王陽明の学統や子孫。陽明関係の佚書。陽明学の日本・韓国をはじめとする外国への伝播等多岐にわたる論文集である。

本学会については、浙江省社会科学院の元院長の王鳳賢先生が

「紀念陽明先生弘揚王学精華」(『孔子研究』一九九九年第三期)と題して発表しており、また本書の編者の銭明氏が「紀念王陽明逝世四七〇周年国際学術討論会綜述」(『浙江学刊』一九九九年第五期)として発表している。

本書所収の論文のうち半数は提要であり、論文も発表原稿そのものと、発表されたものでなく寄稿されたものがある。その中に、故楠本正継教授の『宋明時代の儒学思想の研究』から、陽明学関係の部分の訳を、「陽明後学簡論」(徐儒宗訳)として収められていて、中国の研究者の求めに供している。また本論文集のために寄稿された論文に陳永革の「心学流変与晚明仏学復興的思想特質」、方祖猷「王畿論良知与道教養生術」、呉震「歐陽南野論」等があるが、特筆すべきものとして、王陽明第十六世孫である王詩棠氏の「王陽明世系及遺存在紹興」がある。また王陽明の関連資料として、佚文の研究に永富青地「関于王守仁佚文研究」、編者銭明氏の『王陽明全集』未刊詩詞及び佚文の彙編の考釈が収められている。

○銭明著『陽明学的形成与発展』

二〇〇二年九月、江蘇古籍出版社刊。B6版、337頁。

本書の構成を目次によって示すと次の通りである。

上編 陽明学的形成

第一章 王陽明的世家及後裔

第二章 王陽明早期思想性格的形成

第三章 王陽明中後期思想の変遷